

炎絶唱シンフォギア

形無刀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら目の前に神様がいて、特典（ファイアーエムブレムの力・アクセルワールドの力）持つてシンフォギアの世界へ。処女作です。グダります。駄文です。ご注意ください。入らなかつたタグ・キャラ崩壊・ご都合主義・男の娘。感想まつてます。

目
次

13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	第4話	3話	2話	1話	プロローグ
47	43	38	35	31	28	25	21	18	14	11	8	4	1

プロローグ

うーん・・・ここは・・・？

？「目が覚めたか」

え・・・誰・・・？

それにここは・・・？

見たところゼ○ダの伝説○のオカリナの闇の○殿の入り口のよう
な所だ

？「わしは神じや。そしてここは神の間じや」

男「!?

・・・なるほど。

だから白い翼が生えていて黄色いわつかがあるのか。

神「ずいぶんと反応が軽るいのう」

男「だつて心を読めたらねえ・・・」

神「ああ、なるほどのう」

神は納得した。

あらためてみると優しそうな顔に立派な白いひげ優しそうなオーラといいなんか田舎にいる優しいおじいちゃんを彷彿とさせる人
(?) 物だ。

男「俺は死んだつてことでいい?」

神「すまん。ワシが間違えて君を殺してしまったのだ

といい申し訳無さそうな顔をする。

男「ちなみに死因は?」

神「てんぷれ?とやらじや」

男「なるほどわかつた」

神「で、おぬしは許してくれるのか?」

男「ええよええよこんぐらい」

神「やさしいのう・・・ちなみに聞きたいのだがてんぷれ?とは

なんじや?」

男「簡単に言えばこう來たらこうなるだろうと言うやつだね」

神「じやあこの場合は?」

男「神様が何らかの形でこちらの世界に干渉して誰か・・・この場合、俺が死ぬ事だよ」

神「ふむ教えてくれてありがとう。よし、お詫びにどうしたいのかをおぬしに決めてもらおう。願い事はあるていどええよ」

男「じゃあ、転生は？」

神「はて、転生とはなんじや？」

男「言つてしまえば前世の記憶・・・この場合、俺が今の記憶をもつても元いた世界とは違う世界で生きる事だよ」

神「ふーむ・・・まあいいじやろ。それなら何とかなるわい。ただおぬしの肉体」と持つていくとなると容量をとても使うので赤ん坊からやり直してもらう事になるがの」

男「了解、じゃあ・・・まずシンフォギアの世界に転生したい。」

神「ああ、あの作品か。構わんよ」

男「しつて いるのか」

神「時折の娛樂として人間の作るあにめやげえむとやらは丁度いいからのう」

男「なるほど。じゃあ次、聖遺物としてファイアーエンブレムIFに登場した夜刀神を融合症例で」

神「サービスで暴走や命の危険は取り扱つておくぞ」

男「ありがとうございます。じゃあ次、アクセルワールドの心^{インカーネイト}意システムを俺の能力で欲しい」

神「周りからの違和感がなくなるようにフォニックゲイン操作の延長線上のものとしておくぞ」

男「ありがとうございます。最後に神様の力で2つの特典をパワーアップさせておいてください」

神「ではパワーアップとして龍の変身は水龍(FEの龍)マクムートへの自由な変身を与えておくとしよう。また心意は全般的なパワーアップをしておくぞ」

男「本当にありがとうございます」

神「後2つ話がある、その世界はかなり原作ブレイクが起きてるから気をつけること・・・具体的には、フィーネの魂はないようじや、ま

た、その世界ではフォニックゲインがHUNTER×HUNTERの
念のような特性を持つて居ると言う事じや」

男「わかった」

神「この門をくぐれば次の世界じや」

といい闇の○殿の入り口門を指差した

男「ありがとうございます、いつてきます」

神「うむ」

俺は闇の○殿の入り口に入つていった。

神「初めて転生させたがいい子じやつたのう・・・そうじやサービスとして金運をあげおいてやると、優しい両親の下に生まれるようしようかのう」

神様のそんな独り言は入つていく俺には聞こえなかつた。

1話

知らない天井だ・・・

多分ここが転生先なんだろうな。

となるとここは我が家か綺麗な家でよかつた。

? 「あら、神無^{かんな}、起きたのね」

この人は俺の母親・・・母さんなのか・・・ちょっと待てこの顔ファイアーエムブレムのミコトじやないか?

・・・てことは父親の顔はスマラギかなあ。

母「神無、ご飯の時間よ。」

・・・へ? はん? まさか、まさか、まさか、まさか、まさか、まさか、まさか

母「はいたくさん飲むのよ」

読者の皆さん少しの間賢者タイムとなるので失礼します

賢者タイム中・・・

やあみんなこんにちは神無だよ。ん? 賢者タイムつて何つて? 言わせんな恥ずかしい。

そもそも賢者タイムつてのh・・・あれ・・・急に眠気が・・・

赤ちゃん睡眠中

んん、ここはどこd・・・つて俺ん家じやねえか転生したの忘れてたよ。そういうやあなにかどつかの誰かに一言文句をつけようとしたよな・・・ま、いつか。

それよりも神様が言つてた事が気になるな。たしか、

『その世界ではフォニックゲインがHUNTER×HUNTERの念の
のような特性を持つて居る』

だつたつけ。じゃあ俺にもバン○—ガムとかスキルハン○ターと
か使えるのかなッ!!

あんまり知らないけどマンガをチラツと見てカツコいいなどお
もつたんだよなー。まあスキルハン○ターはあんまりこの世界では
使えんだろうな・・・ハア

まあいいや。それよりもさつきと修行しようこんなたっぷり修行
の時間が取れるときなんてそうそうないからな。

だがここで問題がある・・・修行つて何すればいいんだー!!

「あうあうあー!!」

でもやるつきやない。まず手始めに瞑想してみよう。もしかした
らなにか分かるかもしね。というわけで、瞑想ターム

・・・
・・・
・・・

・・・?

何があるな、これがフォニックゲインか。よし引っ張り出そう。
よいしょ。よいしょ。(イメージ)

・・・だめか引っ張り出せる量がすくないな。まあ明日もある少し
づつやっていこう。

というわけでおやすみー。

一週間後

やあみんな神無だよ。今俺はいつもどうり修行中だよ。ここ一週

間で思つた神様の強化つてスゲーもう結構引き出せるようになつたよ。

さてここいらでここまでで確實に（証拠的ないみで）わかっていることについて振り返つてみようか。

まず家族構成、俺の名は神威かむい 神無かんな0歳

母は神威みこと 命めい 23歳

父は神威すめらぎ 皇こう 23歳

また、神威家はかなり大きな家であること（最近知つた事だが）それが分かつたわけは父さんが事あることに

「将来、神威本家の大黒柱として立派になれ」

と言つたからである（本家なんていつたらやつぱり大きい家柄でしょ）

けどその割には使用人を見かけないんだけどなあ。

後、関係ないけど原作でのこの世界について振り返つてみよう。

この世界は戦姫絶唱シンフォギアの平行世界である事。

戦姫絶唱シンフォギアとはとある理由で特別な災害・・・特異災害と呼ばれるノイズと言う化け物（災害？）が存在している。そしてどある事件をきっかけに主人公たちが様々な事件に巻き込まれていく。と言うお話だ。

さてここから先は不確定要素を含んだお話だ。

まず夜刀神との融合症例であること。これはまだ歌が歌えないためにあるかどうか分からぬ。

つぎにこの世界のフォニックゲインがHUNTER×HUNTER Rの念と似て いると言う事。

だがこれはある仮説が立てられる。それは風鳴翼のアームドギアで説明しよう。

まず、あのアメノハバキリブレード自体は具現化系の能力で出来ていて、全般的な強化を強化系の能力を無意識に使い、蒼ノ一閃では具現化系の能力で大剣にして変化系の能力でフォニックゲインを斬撃にかえて放出系で飛ばすと考えると仮説は成り立つ。また、操作系は月読調のノコギリアームの操作と考えられる。

とまあ仮説を披露したが何も証拠が無いのもまた事実。だから修行して、確かめるよ。

・・・修行中・・・

・・・時は流れて・・・

やあみんな久しぶり。君達からすれば違うかもでも俺にとつては久しぶりだ。

だつてあれから1年たつているからな。まあその1年でたつぶり修行したおかげでずいぶんパワーアップしたぜ。

具体的にはキルアのよう電気を操れるようになつたぜ。
また心意を鍛えたお陰で学園都市の第1位のマネができるようになつたぜ。

・・・さいきん父さんの様子がおかしいから調べていたら不味い事を知つちまつた。

具体的には父さんの弟の龍我りゆうがが神威本家の資産を狙つているそうだ。

「まあ、頭のいい父さんのことだどうにかするだろう。」

俺は心のどこかでそう傲慢な考えを持っていた。万が一に備えることを怠つていたのだ。

そのツケを1年後、自分で払わさせられるとは知らずに。

1年後、家族旅行で事故にあつた。龍我の策ではない不慮の事故に。

2
話

事故から2日たつた。

事故があつてからというものとても忙しかつた。警察に事情聴取されたり、家のことなどだ。何よりもあの龍我がなにかしてくるかもしないと最大限警戒したりとだ。

? 「若様、龍我の方は裁判に遺産の一件を持つて行き、後見人として上手く内部の金を持つていこうとしているとのことです」
そういうながら俺の前に現れたのは陰動いんどう おぼろ 譲さんだ。

この人は我が神威家最強の忍者であり暗部の統括者なのだ。（容姿はF E I Fのオボロがスーツを着ていると思つてくれ。てなみにF Eとは、ファイアーエムブレムのことだ。一応言つておいたのと、父の皇も母の命もF E I Fのスマラギとミコトだ。）

・・・もう一人最強の忍者がいるのだが、もう一人は単独任務に特化しているため二人最強の忍者がいるのだ。

話が逸れたな
それで今この情報が飛び込んできて困っている最中
なのだ。

俺としては、せつかく転生してギアを持つてはいるはず（？）なので原作介入して、色々とやつてみたいんだが、そのためには当主の座は邪魔だ。だがそのわがまままで使用人たちや隴さんに迷惑は掛けたくない。

「だから俺は
・
・
・
」

当主になつて原作までに対策を考えようと思う。なのでまずは、龍我の後ろ暗い所を集めようと思う。

神無 「朧さん、龍我の後ろ暗い所を集めて置いて欲しいんだ」
朧 「わかりましたが、若様はどうするのです？」
神無 「俺は、弁護士を探して弁護を依頼していくる」

そう言つて朧さんはいなくなつたので、俺も外出の用意をしてくるとさつさと家を出て行つた。

・・・移動中

神無「何でこの世界にこの法律事務所があるの？」

そうつぶやいた俺は悪くない。だつてその看板には、
『成歩堂法律事務所』

とかいてあつたからだ。だが、悪くない。なぜならこの事務所は、
『逆転裁判』で有名な事務所だからだ。ここならきっと何とかなるだ
ろう。

そう思い中に入つていった。

そして扉の前に立つた

そして扉を叩いた。

とんとん

「ハーアイ」

ガチャヤツと扉が開いて出てきたのは、どことなく明治時代っぽい服
装（作者はよく知らない）にへん・・・特徴的な結び方（作者はre）
をした少女・・・綾里真宵が出てきた。

真宵「えつと、ぼくは、迷子かな？」

神無「すいませんここが成歩堂法律事務所でしようか」

真宵「え？ あ、はいそうだけど」

？「真宵ちゃん？ どうしたんだい？」

と言いながら奥から出てきたのは、青いスーツに赤っぽいネクタイ
をしておか・・・こちらも特徴的な髪型をした青年、成歩堂龍一が
出てきた。

そして、成歩堂さんがこちらを見て。

龍一「真宵ちゃん、そのこは迷子かな」

真宵「なるほどくん（成歩堂のこと）、この子こに用があるみたい
だよ？」

龍一「そうなのかい？ でも今は仕事は何も無いよ？ 君、ここで親御

さんと待ち合わせかい？」

神無「いいえ。違います。今日は、弁護士成歩堂龍一さんに弁護の依頼にきました。」

真宵 龍一「ゑ」

龍一「こんな子供が!？」

神無「こんな子供が来るほどの事態とお考え下さい」

真宵「それって緊急事態つてことだよね。」

神無「はい、正式な依頼料も前払いいたします。」

龍一「ま、まあ、そこにかけて。話はそれからだよ」

神無「わかりました」

といつて話をする準備としてお茶を貰った。

龍一「それで詳しい内容とは何かな?」

神無「はいそれは・・・」

俺は全て話した。両親を事故でなくしたこと、その遺産を父親の弟が裁判でぶんどうとしている事等を丁寧に話して言つた。

そして話し終わつたら、成歩堂さんは、

龍一「わかりました。依頼を受けましょう。・・・どこまで出来るか自信ないけど

神無「お願ひします。それで、これが依頼料です。」

といつて、俺は、100万円の依頼料が入つたアタッシュケースを机に置いた。

それを見た二人は傑作だつたと言つておこう。またこの裁判で、龍一は幾多もの犯罪をしながら、それを隠蔽していたことがばれ、そのまま警察のご厄介になつたことを付け足しておこう。

3話

裁判から数日がたつた。

裁判が終わつた次の日からと言うものの俺の生活は恐ろしい速度で変化していった。わかりやすい変化は当主となつたことで、使用人や部下たちの呼称が、『若様』から『当主様』、『神無様』と呼ばれるようになり、仕事をしながら覚えていく毎になつたことだろうか。執務室に入つて引き出しの一一番上に父さんが万が一に備えて作つてあつた仕事のガイドブックが無かつたらどうなつていた事か。

俺はあの日から万が一に備えるようになつた。そのため、3歳の頃からやつていた（やらさせられていた）剣術も自分から取り組み、これまで以上に修行に熱が入り、仕事もやるようになつた。

ああ、そうそう使用人はみんなやめることなくみんな残つてくれるそうだ。聞いた話では、龍我を退けた話が残る要因になつたらしい。そして今、俺は大変困つている。それは・・・朝のランニングのランニングコースで、捨て子を見つてしまつたからだ。T字路の電柱のした、捨て猫の入つていそうなダンボールの箱に入つているというベツタベタなテンプレで赤ん坊が捨ててあつたからだ。

それを見て俺は今の自分と重ねてしまい助けたかったが、神威家に迎え入れればどんな危険に巻きこめるか分からないがこの子を助けてくれる人があらわれるとは限らないからどうしても二の足をふんでしまうのだ。

そしてふとこんなことを思つた。

「後で『自分の気持ち』が軽くなる道を選ぼう」

だから俺はこの子を助けることにした。

だからまず、隕さんに電話で連絡を入れた。2、3回コール音がなつた後、

隕「はい、隕です。神無様どうなさいましたか。」

神無「隕さん、ランニング中に捨て子がいた。この子を助けたいから、車をよこしてくれる?」

隕「捨て子でござりますか。分かりました5分ほどお待ち下さい」

5分かその間手持ち無沙汰だなじやあその間にこれからのことを考えよう。まずは、2年後、つまり原作10年前に起ころる事件、雪音クリスが紛争に巻き込まれる事件。これに介入して雪音 クリスを保護する。

そしてその5年後、原作5年前のネフイリムが暴走する事件に介入、マリア・カデンツヴァナ・イブとセレナ・カデンツヴァナ・イブ、
暁切歌、月読調の4人を助ける。

これが当面の目標d・・・ブロロロロ・・・つと来たか。
じやあこの赤ん坊をだいてつと。

朧「神無様、その子が」

神無「ああ、話していた子だこの子のことが分かるものがあるとい
いんだが」

朧「名前も無かつたら悲惨でしようね」

神無「その時は俺たちがつければいいさ」

朧「はい、そうでござりますね」

そう話しながら家（屋敷）へと帰つた。

・・・移動中・・・

館について、この子のことを調べたが名前がなかつた。

だからみんなで名付けようとしたがみんながみんな『この名前がいい』『いやこの名前が』『いやいやこの名前こそ』といつてきまらなかつたため

『なら当主様に決めてもらおうか』

と言ふ事になつた。正直ネーミングセンスに自信は無かつたが決めざるをえなかつた。どうしようかと外を見たら庭の桜が満開で綺麗だったので、そのまま

『桜』

となづけた。

そして俺はこの子を当主代理まで勉強を教えれば自由になれるんじゃないとき気付いたのはまた別の話。

第4話

桜を拾つてから1年たつた。

ここ最近になつてキルアの能力の弱点（電気を纏うときにはスタンガンなどで、電気を溜めておく必要がある）を克服する為の能力開発をした。開発した能力名は電響エレキエコーだ。効果は、

『体内的電気を増幅でき、また、その貯蔵量に限りは無く、無限に増幅できる』

と言うキルアに真正面からけんかを売つていい能力だ。

みんな疑問に思つてゐるだろうから先に説明しておくと、この世界のフオニックゲインは念に似たものであつて厳密には念ではないので本家では条件をつけることで発動可能な能力は無く、フオニックゲインが持てばなんだつて出来てしまふのだ。（本家では制約をつけることで消費するオーラ（この世界のフオニックゲイン）を減らしてやつと使えるのに対して、この世界の人間はアホみたいにフオニックゲインの限界量が多くまた成長限界が無い為に出来る力技のようなものだ）

察しのいい人はは分かつただろうが、この世界には魔力切れ（フオニックゲイン切れ？）のようなものは存在するが、多くの人が認知してないから最近分かつた分かつた事実だ。

最近分かつたのはそれだけじゃなくて念の性質、強化・操作・放出・変化・具現化は適正は最低100%づつあつて、そこから250%が割り振られている為、ハンター×ハンターの世界よりも念が強いことが分かつた。ちなみに俺は、

強150・操150・放150・変150・具150

とバランス型だった。

・・・仕事？ああ、ちゃんとやつてるよ。凄く大変だから隣さんに手伝つてもらつてね。

・・・1年後・・・

5歳になりました。

それじゃあ、ちよつくら紛争地帯に行つてきます。なぜつて？そろそろ雪音クリスを助けに行こうかなと思つてな。え？なんで助けるかだつて？一方的とは言え知つている人が苦しんでいてはいそうですかつて言えるほど俺は薄情になれないからだ。そして何より「後で『自分の気持ち』が軽くなる道を選ぼう」つて決めたからな。

と、その前に、

神無「朧さん、準備できた？」

朧「はい、いつでも」

それじやあちよつくらいつてきます。

S i d e o u t

・・・移動中・・・ 注意・外国語は「」で表します

? S i d e

ダダダダダン

ダダダダダダダダダダン

米国兵A【な、なんだあいつは】

米国兵B【銃を撃つてもきかないだと!?】

? 「なにがおきてやがるんだ？」

冷たい建物の床をボロい雑巾で拭いていると突然大嫌いな大人たちのそんな怒号が聞こえた。まあ、アタシにはカンケイ無いんだとそう思つていた。だがこのあとの出会いがアタシの・：雪音クリスの人生を大きく変えるものだと知つたのはそう遠くは無かつた。

S i d e o u t

神無S i d e

撃ち出される弾。一瞬だけ止まつて、元来た方向に帰つていく。そ

の繰り返しが15分ほど続くと銃撃が止んだ。兵士を皆殺しにし終わったからだ。

そういえば言つてなかつたが、ベクトル操作は操作系の能力で出来ている。だが、これはフォニックゲイン操作の天才にしてもらつた俺がたまたまコツを掴んだから使えるようになつたもので、そのたまたまがなかつたら今も使えない代物であると考えると相当凄いものである。

とまあ考え方して戦つているうちに敵は全員倒したわけだから、今回的目的を果たすとしよう。

まず、色んな建物に入つて中を確認していく。そのなかで、紛争に巻き込まれた子供を助けていく。朧さんの準備とは、子供を保護するための準備なのだ。

途中でイチイバルのシンフォギアを見つけたので回収しておいた。そして目的の場所に辿り着いた。何故分かるのかと言うと、円^{エンド}(いわゆる気配を察知しているからだ)で確認したら多くの子供のフォニックゲインを確認したからだ。

中に入つていくと、恐れや恐怖の目を向けられた。同じ子供とは言え、さつきの大人たちの怒号を聞いたせいだ。そこで俺は子供達の前に立つてこういった。

「俺はお前たちを助けに来たわけじゃないを前達をざらに来た」

と言つた。子供達は何を入れているのかわからないという顔をしていたが、大人しく付いてきた。抵抗しても無駄だと思つたんだろうな。

そして、雪音クリスを見つけると、朧さんに頼んで、俺の乗る車に乗せるように頼ん

そして車に乗ると、車を発進させた。

車内では雪音クリスが怯えるように睨んできた。多分どうされる

のか分からぬから怯えて、反骨心から睨んでいるのだろう。

そして、我が家に着くと（会話も無かつたし何も無かつたので割愛）、子供たちだけの家を建てた（あんまり触れてないから忘れやすいだろうけど家はかなり金持ちなのだ。）。

そしてこの子達の勉強を教える講師を呼んで勉強を教えた。

こうする事で、我が家の将来の安泰を狙つているのだ。この子達も言葉はあれだつたが結果的に助けてくれたと感じたのか満更ではないようだ。

だが雪音クリスだけは違つた。どうしても大人に従うのを嫌がっているのだ。ちゃんと勉強はしているらしいのだがかたくなに人のいうことを聞かないため、みんなからかなり浮いている。そのため雪音クリスと話をするために今、俺は雪音クリスの部屋の前にいる。

そしてノックをしてから部屋に入る。すると、雪音クリスは部屋の隅でうずくまつて、苦しそうなうめき声を上げていた。いそいで駆け寄ると、高い熱を出していることが分かつた。そして、急いでベットに横にした。

そして、自分の手で看病をした。看病のお陰か2日もするとすっかり元気になつた。

それからというものかたくなに閉じていた口を俺限定で開いてくれるようになつた。

5話

神無 Side

クリス（本人からそう呼べといわれた）が回復してから2年がたつた。今では、

「オイ神無、メシをくれ」

と、名前で俺を呼ぶようになつた。それまでは、『おまえ』呼ばわりされていた。

また、俺の言う事限定で、言う事はきくようになつていつた。

また桜においては、

「かんなにいしゃまゝ。くりすねえしゃまゝ」

といつて、アヒルの子供のように常に俺かクリスにべつたりだ。可愛いとは思うけどシンコンになるほど可愛いとは思えないんだよなあ。（主人公は可愛いのは理解できるが、そこで終わる人）

朧 「神無様、大きい仕事が入りました至急おいで下さいませ」

神無 「嗚呼、分かつた」

という訳で失礼する。

Side out

· · · · ·

? Side

? 「いよいよか・・・

? 「そうね、ついに私たちの夢の結晶ができるがるのね」

赤いシャツにピンクのネクタイをした赤髪の男・・・風鳴
がつぶやくと、ピンク色の服に白衣を纏つた女性・・・桜井弦十郎

が答えた。一人が見ている先では髪の一部をサイドテールにした女

の子・・・風鳴 翼が緊張した面持ちで自分の胸元を見ていた。そこ

にあるのは第一号聖遺物、『アメノハバキリ』の破片を使つた待機状態のシンフォギアのペンダントがあつた。そして、とある研究員が、声を出した。

「実験準備完了です。」

その声を聞いた、桜井 了子が指示を出す。

「聖詠、開始」

「聖詠、開始します」

と声を出し、風鳴 翼が聖詠を歌いだす。

すると、ペンドントが光り輝き歌を歌う少女の姿がパワードスーツのような服を着た姿になっていた。それは、彼らの実験の成功を意味していた。

あれから、3年がたつた。

今、俺は10歳になり、最近鏡を見て気付いた事があった。それは、俺の顔がファイアーエムブレムIF^{イフ}に出てくる、カンナ（女主人公）の顔であつたことだ。

・・・急いで下半身を確認したのは、仕方がないだろう。

そして十歳になつた。それはつまり、原作5年前と言う事だ。となれば、1つ事件が起きようとしているのだろう。それは、ネフイリム暴走事件だろう。だがそれが起きるには、まだ早いだろう。だからそれまで、シンフォギアの訓練をしようと思う。

・・・二課に俺の存在がばれないようにする結界を張る訓練に時間がかかるつて今までできなかつたのは、ここだけの話だ。つと、そんな話をしないでさつさと訓練を始めよう。まずは結界を張つて、聖詠を歌う。そして俺が纏つていたのは、ダークプリンセスの甲冑を近未来風にした鎧とマントだった（頭はギャングニールのようになつていた）。

そしてアームドギアは何故か二種類あつた。一つ目はこのギアの元となつた武器、夜刀神だ。もう一つは夜刀神が砂鉄になつて、電気で操るアームドギアだつた。

そして俺は時間いっぱいまで、シンフォギアを使つた修行に明け暮れた。

そして今日、ネフイリムが暴走する日だ。なので今回も介入する。例の如く隕さんに搬送の準備をしてもらい、早速出かけた。クリス達には仕事だと言つて。

・・・移動中・・・

?【くそ、実験は失敗だ】

?【早く脱出を】

・・・ そうか、こいつらに容赦はいらないな。

俺が付いた時に感じた感想だつた。こいつらはネフイリムを起動するだけ起動しておいて、制御できないからそのままにして逃げる。何て考えていやがる。

だから俺はそいつらを皆殺しにした。できるだけ、大量の血が出るようになる。

そして俺は今、

「お姉ちゃん達は助けて見せる」

「やめなさいセレナ。そんな事したつて私たちは全く嬉しくないわ」と、ネフイリムに絶唱を仕掛けようとしている少女とそれをやめさせようと説得する少女に近づくと、

神無「そんな事をしなくていい」

と声を掛けた。すると少女達ビクツツとなつて振り向いた。そして、少女達は何か言おうとしていたがそれをさえぎつて、こういった。「大丈夫、俺が何とかするから」

といつて、俺は聖詠を歌つた。そしてギアを纏い砂鉄モードでネフイリムをズタズタに切り裂いた。

神無Side

ネフイリムを切り裂いてからと言うもの、俺は困っていた。原因は目の前にいる少女二人だ。この二人、警戒心がMAXなのだ。妹も姉も恐がりながらも、涙目でお互いを守ろうとしているのだ。

なので嘘の事情（ここに来る経緯とか）を交えながら話したら警戒を緩めてくれた（全くは解いてない）。

そしたら奥のほうから二つの影が飛び出してきた。その二つの影は俺と、マリア・カデンツヴァナ・イブとセレナ・カデンツヴァナ・イブとの間に立ち、

? 「マリアとセレナは、渡さないデス!!」

? 「マリアとセレナは私たちが守る」

と言つてきた。二つの影とはそう あかつき 晓 きりか 切歌 つくよみ 調 しらべ である。なので二人にも事情を説明すると、片方は嫌そうな顔に、もう反対はすこし警戒を緩めた。だが警戒心があつても緩んでいたからか比較的はなしやすかつた（一名のぞいて）。そして、

神無「君達を家に迎えたいんだがどうする？」

ときいた。

そうしたらいくつかの質問が来た。どこに住んでいるのか、遠回りに危なくないかとか聞いてきたので懇切丁寧に説明したら四人とも付いてくることになつた（一人洩々と言つた感じだつたが）。ちゃんとシンフォギアは回収したよ？原作に無いギアが有つたけど、セレナが生きてる分多くないとね。

そして我が家について部屋割りをして荷解き（という量もないきがするが名誉の為に言つておこう）が終わるであろうタイミングで月読調の部屋へと向かつた。そしてドアをノックすると、

調「・・・どうぞ」

と聞こえたので入つていった。

すると、俺を見るなりとても不機嫌そうな顔になつた。俺何もしてないよね？

そして部屋に入り月読と話を始めた。

調 「どうして私たちを助けたの？」

神無「その質問に対していくつか質問するよ。それに全部答えられたら答えよう。どうだ？」

調 「分かった」

神無「じゃあ一つ目、目の前に重い荷物に苦労しているおばあさんがいました。その時、君はどうする？」

調 「・・・そんなの決まつてる。助ける。」

神無「どうして？見てみぬ振りもできるよ？」

調 「そんなの、後味が悪すぎる」

神無「そう、後味が悪すぎる。だから助けたんだ」

調 「!!。・・・ありがとうございました。」

神無「そうかい？」

調 「・・・調」

神無「ん？」

調 「調と呼んでください」

神無「わかつた。俺もなら好きなように呼ぶと言い」

調 「分かりました」

と言つたのでそのまま少し話して、調の部屋を後にする。また切歌・マリア・セレナ（三人にそう呼べといわれた）とも話（雑談はバラバラだったが始めはみんなどうして助けたのかを聞いてきた）をしてみんなと仲良くなつていつた。

そしてあの日から半年が過ぎてからと言うもの、俺・桜・マリア・

セレナ・クリス・切歌・調の仲がいい。どれくらいかというと、

切歌「お兄ちゃんにダービーブデース♪」

調 「ダイブ♪」

クリス「こら、二人とも神無は仕事の後なんだからやめてやれよ」

マリア「そうよ。神無も疲れているだろうからやめておきなさい」

セレナ「大丈夫だと思うよ。姉さん。神無は優しいから」

マリア「でも

神無「大丈夫だよ。クリス、マリア可愛い妹ができたみたいで嬉し

切歌・調
「・・・」

桜「かんなにいさま、べんきょうがおわりました……つてどなさつたのですか？」

という感じである。俺より年下の切歌と調は俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶ。もう分かつて入るだろうが桜は素で『兄様』と呼んでくる。ちなみにさつきの台詞を吐くと切歌も調もどうしてか、顔を赤くしてからこちらを睨んでくる。何故睨まれる。解せぬ。

この日、何だか嫌な予感がした。今となつてはほとんど忘れた原作知識による予感だ。

これまで、五人の事を助けることばかり考えていた為残りの原作知識がほとんど残っていない。だが、感覚として、原作に起こつた出来事が分かることがたまにあるのだが今回はそれで分かつたが、もう当てにならないだろう。多分最後の勘になるだろう。だから、最後かもしれない原作介入（意識的なのは）だから気合を入れていこう。
もしかしたら、二課と会つて協力者になるかもしないからみんなに声を掛けていこう。

神無「みんな、聞いてくれ」

神無「俺はこれから用事で出かけるけど、もしかしたらこれから昼
夜問わず出かけることになりそうだからそのときかよろしく頼む……
手伝いたいと思つてんんだろうけど、そのもしかしたらがあたつたら
みんなの大嫌いな大人たちが関わつてくるからやめておいたほうが
いい」

といつた。そしたら、

マリア「・・・神無がそういうんだもの。そうなるかもしれないって考えておくわ。あと神無の仕事も大体覚えたし仕事もやつておく

わ」

セレナ「・・・あんまり無茶はしないでね」

クリス「・・・そういうことだつたらしやーねーなあんま心配かけ
るなよ?」

調「・・・がんばって」

切歌「・・・早く帰つてくるデスよ?」

神無「・・・ああ、分かつた」

ああ、みんなの優しさがしみるなあ。じやあ頑張りますか。

7話

神無 Side

家を出てから3時間半電車でゆられてやつてきたのは長野県、皆神山町だつた。ここどこかで原作の事件が起きるはずだ・・・といつても分からぬ事だらけだから手当たり次第、行き当たりばつたりでどうにかしようと思う。

・・・行き当たりばつたりに移動中・・・

ドカーン!!

うおツツとなんか爆発があつたみたいだな。行つて見るか。

Side out

??? side

? 「指令! 長野県の皆神山の遺跡でノイズが出現しました!!」

弦十郎「ノイズだとおツツツ!?」

了子「翼ちゃんいける?」

翼「ハイツツ」

弦十郎「翼そんな緊張しなくてもいい」

翼「おじ様・・・はい」

Side out

神無 side

まずいな・・・ノイズに囮まれてゐる。そして後ろにはあの天羽奏がいる。状況としては、天羽 奏の悲鳴を聞きつけ、飛び込んできたと言うのが今の状況だ。また天羽 奏はといふと、奏「パパ・・・ママ・・・」と言つた風に茫然自失な状態だ。だから仕方がないので俺は切り札を切つた。

神無「Fight to yato ou gami tron」

Side out

? Side

? 「し、指令!？」

弦十朗「どうした!、藤堯!!」

叫んだのは、キーボードが大量に並んだ台の前に座る男・・・藤堯
朔夜さくやだつた。その声にどうしたのかと問う弦十朗。

? 「こ、これは、見たことの無いアウフヴァツヘン波形です」
そう叫んだのは、大量に並んだ台の前に座る女性・・・友里ともさと あお
いだつた。

了子「見たこと無いアウフヴァツヘン波形と言う事は」

弦十朗「正体不明のシンフォギアだとおツ」

翼「おじ様用意ができました・・・って、どうしたのですか?」

了子「それがね・・・」

といつて翼に状況を説明した。

Side out

神無 Side

神無「これあと少しだなつと」

なんてつぶやきながら、ノイズを切り伏せていく俺。

そして何十体目かのノイズを倒すとノイズは全ていなくなつた。
そして一息つこうとした瞬間、体が急に動かなくなつた。

? 「動かないで下さい・・・つといつても動けないでしようけど」と言いながら物陰から出てきたのは茶髪にスーツをピシツと着た男性だつた。

? 「申し訳ありませんがこのまま付いてきてもらえませんか?代わりに手錠はなしにしますので」と礼儀正しく言つてきたので、

神無「わかりました」

といつて、影縫い（後から名前は聞いた）を解除してもらつて付いていった。

天羽奏は正気に戻ったのか暴れていた為取り押さえられながら連

れて行かれた。

・・・移動中・・・

そして連れてきられたのは、家の近くの有名な学校である私立リディアン音楽院高等科の中央棟だつた。

そして中に入り、エレベーターに乗り込むとさつきの礼儀正しい男性が携帯をかざしていた。すると、壁から取っ手のような物が飛び出してきた。

どういうことかと首をひねつていると。

? 「取っ手に掴まつて置いてください。これからとても速い速度で下にくだつて行きますから」と言われたので大人しく掴まつておいた。

そして、エレベーターは地下へ急降下していった。

神無Side

とても高い位置からの急降下がおわった。

そして扉が開くと、いきなりクラッカーのパンツという音が神無を出迎えた。そのうえ、上を見上げると『歓迎、神威^{かむい}神無様^{かんな}』と、書いてあつた。

そして、赤いシャツにピンクのネクタイをした大男が、

弦十朗「ようこそ、神威神無君、ここは、特異災害対策起動部第二課、そして俺は、こここの指令をしている風鳴^{かざなり} 弦十郎《げんじゅうろう》だ」

神無「どうも、俺は・・・つてもう知っているんでしたね」

弦十朗「まあな」

了子「ハイハイ、私はできる女こと桜井^{さくらい} 了子^{りょうこ}よん♪」

神無「はい、よろしくお願ひします」

といつた和やかな雰囲気から一転、

神無「それで俺に何のよう・・・つて待てよ、あのノイズを倒せる鎧の事か?」

弦十朗「そうだ・・・君にはいくつか聞きたい」

神無「いいですよ」

1つ目、どういった経緯を持つて手に入れたか。

2つ目、その力のことをどこまで知っているか

3つ目、その力をどう使うのか、また願望として自分たちにその力を貸してくれないか

といつてきた、なので少し嘘を混ぜて、

1つ目、よく分かつていながら記憶のある頃からもうあつた

2つ目、運動能力が上がること、原理は分からぬけどノイズを倒せること

3つ目、具体的には思いついていないが、協力する事には肯定的である

と伝えた。すると弦さん（弦十朗）は、

弦十朗「こんな小さな女の子にこんなことさせるなんてな申し訳ない」とかいえんな

とつぶやくと、それに俺は待ったを掛けた。

神無「あの・・・」

了子「どうしたの?」

神無「俺、男です」

その瞬間空気が凍つた。

弦十朗「な、なにい!?

了子「ええええええええええええええ!?

オペレーター二人「エツ」

つと、みんなに驚かれた。女顔だと思つていたけど流石にへこんだ

(グスン)

弦十朗「ゴホン、ま、まあ色々とあつたが聖遺物が体のどこにあるかを調べなければならんな」

了子「りょうかーい♪」

神無「分かりました」

・・・検査中・・・

まず、結論だけいうと心臓にあつた。ただ、心臓の真ん中にでんでん、とあつたが。

そういえばあの女の子のことを聞いてなかつたと思い、聞いてみた。

神無「あの、俺とはバラバラで来た女の子はどうなりました?」

弦十朗「嗚呼、あの子か・・・あの子は今、とてもじやないが話せるような状態じやないぞ」

神無「それでも構いません」

弦十朗「・・・分かつた」

・・・移動中・・・

奏「フザケルナツ!! どうして父さんと母さんが死んだんだ!!」

といつて赤髪の女の子が椅子に縛られながら暴れていた。そして、両親の死を受け入れてなかつた。

弦十朗「あの子は天羽 奏、君がいた遺跡の唯一の生き残りだ」

奏「お前等ツ!! あのバケモンと戦う力を持つてんだろうツ!! ソイツをアタシによこせツ!!」

神無「すみません、弦十朗さん。あの子と一対一で話がしたいです」

弦十朗「ううむ・・・。わかった。何とかしよう」

といつて一対一の場を作つてもらつた。

そして俺はすぐさま、椅子の拘束を外した。するといきなり獅子のように戸髪を荒らぶらして、飛び掛つてきて俺を押し倒して馬乗りになつた。

そしてそのまま全力で殴つてきた。

奏「オマエの所為だツ!! オマエがもつと早く助けにこれば父さんや母さんは死ななかつたんだツ!! フザケルナツ!! フザケルナツ!! フザケルナアアアアアアアアアツツツ!!!!」

といつて泣きながら全力で殴つていたがだんだんと勢いはなくなつていき、最後は俺に馬乗りのまま泣きだした。

奏「どうしてだよ・・・どうして殴り返さないんだよう・・・」

と、聞いてきたので俺は

神無「本心で殴りかかってきてない優しい子を殴れるかよ」

といつたら、驚いた顔をしてから抱きつきながら泣き出した。

そして、五分くらいすると弦十朗さんが入ってきて状況を見て、

弦十朗「あんな風に女の子を泣かせるのはどうかと思うぞ」と、いわれた。

しかし、それでも復讐だけはやめることができないといつたのでどうにかしようという研究が始まつた。

神無Side

研究が始まつて一ヶ月なんともう適合指数を引き上げる薬・・・LINKERが開発された。

その間に、翼（当人からそう呼べといわれた）や奏（当人からry）と友好を深めていた。

初めて会ったときは凄く警戒されていたけど、今では仲良くやつていて。が、翼があまり緊張していた為か、仲良くなる事に時間を取られていた為、まともな戦闘訓練ができていない。

そのため今、ノイズが現れたらまともな連携ができずに、どちらかが多大な負荷になつたり、被害が広がる事が懸念されている。だが、今は実験に集中する時である。

何度も、LINKERを打ち込まれてボロボロの奏に注射が打ち込まれた。すると、奏が酷い悲鳴を上げ始めた。

すると、俺の横にいた翼は「ヒツ」という声を上げ俺の後ろに隠れて様子を伺い始めた。

朔夜「適合指数、上昇。しかし、ギアを纏うほどの指数になりません」

了子「やっぱりあの子じゃ無理なのかしら」

といい終わるかどうかというタイミングで悲鳴が終わつた。

了子「実験は終了よ。今回も失敗つてとことね」

といつていると、

奏「何勝手に終わらせようとしてんだよ。こつからが大事なところなんだろうが」

了子「なッまさか！」

といふと、奏は予備のLINKERを取り出し自分の首に注射した。

すると、奏はまた悲鳴を上げたが今度は、これまでとは違つた結果が出てきた。

朔夜「適合指数上昇。こんどは纏えそうです」

「 と、いうと、奏が

奏「C r o i t z a l r o n z e l l G u n g n i r z i z
z i z」

と、歌うと奏はギアを纏つていた。そして奏は、
奏「これがあいつらに復讐する力か」
といいながら高笑いしていた。

なんてことがあつてから2年と8ヶ月たつた夏、原作開始のコンサート事件が起きる年の6月。連携や仲の良さは自分的にはまああるほうだと思う。

そして、なんと弦さんと了子さんが数年前に結婚していた事が分かつた。最初は何故フイーネがと思ったがここにはフイーネの魂がないのを思い出して納得した。

なんて考えていると警報がなつた為現場に向かつていった。

そしてギアを纏いノイズを殲滅していった。

奏は防御を捨てた圧倒的な攻めでノイズを近づかせなかつた。

アームドギアの槍を右に振るつたらその勢いのまま右足の後ろ回し蹴りが入り、そして右足を地面につけたら突きや縦振りをかましていた。

翼は刀のアームドギアを縦横無尽に振つて一体一体を確実に減らしていった。

俺はというと、まず砂鉄モードにしたアームドギアを振るい、大雑把にノイズを片づけて刀モードにして切り裂いていった。

そしてノイズを片づけた。

S i d e o u t

奏S i d e

アタシは今、埋まつたりした自衛隊隊員を助けていた。すると若く、まだあどけなさの抜けない隊員がこう言つてきた。

若い隊員「ありがとう。埋まつてもうだめかと思つたけれど、歌が聞こえたんだ。その歌に、勇気をもらつたよ。本当にありがとう」

奏「あ、ああ。どういたしまして」

お礼言われて驚いたアタシだけど何とか返事をしておいた。

すると、若い隊員は満面の笑みで仲間とともに戻つていった。

それを見た、アタシはとても嬉しいような恥ずかしいような複雑な気持ちになつた。

S i d e o u t

神無 S i d e

俺達はいま、海を一望できる道路でランニングをしていた。
すると奏が話しを振つてきた

奏「なあ、神無、翼」

神無「ん? どうした?」

翼「どうしたの奏?」

奏「誰かに歌を聞いてもらうつて、いいモンだな」

翼「ああ、そうだな奏」

神無「全く、そんなことも知らなかつたのか」

奏「なんだよ神無、その言い方。お前は誰かに聞いてもらつたことあるのかよ」

神無「ま、俺の家は孤児院もやつてるから、その子供達に聞いてもらつたことがあるからな」

翼「そうだつたのか」

奏「マジかよ」

といつた風にランニングを終わらせて休憩室で休憩していると、弦さん（弦十朗のこと）が入つてきて雑談をしていると少し真面目にそれでもつて優しいO T O N Aの顔をしてこう切り出してきた

弦十朗「君達には夢はあるか?」

翼「夢・・・ですか」

奏「夢か・・・」

神無「夢ねえ・・・」

三人ともおかしな顔になつた。

翼は、夢を持ちたそうな顔をしているが何かに葛藤している顔に、俺と奏は、自分の夢がよく分からないという顔になつた。

それを見て弦さんは少し悲しそうな顔をした。

弦十朗「お前たちくらいになれば夢の一つや二つは持ちそうな物なのだが」

神無「翼はなんつーか持つているようだがな」

翼「なツ」

奏「なあ、翼の夢ってなんだ？ 聞かせてくれよ？」

翼「だが私は・・・剣でなくては・・・」

神無「そんなの如何でもいい。心のそこから如何でもいい。それよりも翼、俺はお前の夢が聞きたい。どんな夢でもいい、弦さんや奏、俺なら笑わずに聞いてやるから。な？」

翼「ツ!!」

神無「どうした・・・つて、うわあ!?」

翼がうつむいたかと思うといきなり抱きついて泣きはじめた。すると奏から鋭い視線が飛んできた。

どうしたものかと悩んでいると

翼「神無、奏、おじ様。私の夢を聞いていただけますか？」

翼は決心した顔になつた。

弦十朗「おう！」

奏「ああ」

神無「うん」

翼「私の夢は、もつとみんなに私の歌を・・・ううん私だけじゃない神無と奏の歌をもつとたくさんの人々に聞いて欲しい」

神無Side

翼「私の夢は、もつとみんなに私の歌を・・・ううん私だけじゃない神無と奏の歌をもつとたくさんの人々に聞いて欲しい」

奏「そうか、ならその願い叶えないとな」

と言い合っていたが俺は『いそいそ』とそして『こそそそ』と部屋を脱出しようとしていたが、

弦十朗「どこに行くんだ神無君」

と言われて「ギギギ・・・」と言わんばかりにぎこちなく振り返った。

すると、いたずらっ子がしそうな満面の笑みを浮かべる奏と泣きそ
うな翼がいた。

翼「神無は私たちと一緒に歌うのはいやなのか？・・・」

と、今にも泣きそうな、そして消えそうな声音で問い合わせて、
奏「まさかこーんな美少女たちの願い事を叶えてやれないなんてい

わないよなあ。神無」

と、とてつもなく俺にとつては恐怖の笑みで問いかけてきた。
だが俺は諦めなかつた。

神無「けど、どうやつて聞いてもらうんだよ。具体的な方法は？」
奏「ンなモン『アイドル』やるに決まつてんだろ」

神無「だが俺は男だ」

？「そんな物、初めから公表しておけばいいんですよ」

と言つて、入ってきたのは、救いの神のような顔をして逃げ道を塞
いできた男性、緒川慎次だつた。

神無「ちょっと緒川さん、何で貴方はそつち側なんですか」

慎次「まあ、いいじやないですかやつてみたら意外と楽しそうです

よ」

神無「まあ、百歩譲つてアイドルやるのはいいですけど女物の衣装
は着たくないなあ」

弦十郎「まあ、そこは諦めてくれ」

・・・神は死んだ（イヤ、死んでないよ!）

と言いながら、みんなの長い長い説得によつて俺は負けてしまつた。（つまり、女物の衣装でアイドルを行う男の娘アイドルになることが決まった）

だがここで問題が起つた。いつてしまえばユニット名の案がないのだった。

原作どおりなら奏と翼しかいなからツヴァイウイングという名前が使えたが今は使えない。なぜならツヴァイとは、どつかの国の言葉で2を現す言葉だからだ。

なら次のドライを入れてドライウイングにしようかとなると何故だか、乾くほうのdryをイメージしてしまうなどの事があり取りやめた。

また、スリーウイングなどの案もあつたが、奏の「ダサイ」と言う一言に沈んでいた。

そしてあーだ、こーだと進んで行く中で俺はユニットの名前を黙つて考え、そして、

神無「種族を現す『トライブ』と3を現す『ドライ』、何処かへ行く意味の『ドライブ』で歌と言う翼を持つ種族・・人間の中の三人・：俺たちがどこまでも飛んで往くと言う意味をこめてドライブウイングつてのは如何だ。」

と言うと、周りは一瞬ときが止まつたように静まり返り、

奏「いいじやねえかドライブウイング」

翼「神無と奏とどこまでも飛んでゆく・・・うん」

弦十郎「一人ではなく三人で・・・か、お前たちにぴつたりだな」

奏「じゃあドライブウイング頑張つてやるぞ!!」

神無 翼「おお!!（うん!!）」

そして俺たちは訓練や出撃の合間に3ヶ月間みつちりアイドルになる為の練習をした。

基本の发声練習からダンスまでやつた。

そして俺達は男1人、女2人のアイドルユニット『ドライブウイン

グ』としてデビューして、たつた1ヶ月で『東京ネオ国技館』（実際に
はないよ）でライブを行う事になった。

また、大人の事情でネフシユタンの鎧の起動実験が裏で行われるよ
うになつてました。

・・・アイドル活動が楽しい自分としては複雑な気分だった。

? Side

? 「未来^{みく}、どこにいるの？もう会場着いちやつたよ？」
と、茶髪のショートカットの女の子・・・立花^{たちばな}響^{ひびき}が道の端に寄つて、電話していた。

未来『ゴメン響。今日、お婆ちゃんが腰を痛めちゃつたらしくて：：たいしたことはないらしいんだけどこれからお見舞いに行かないといけないんだ』

響「そんない。じゃあライブはどうするの？未来が誘つてくれたのに』

未来『悪いんだけど響一人でライブに行つて欲しいんだ今度帰つたら感想聞かせてね』

響「うん、わかつた。帰つたら「もういいよ」って言うくらい聞かせてあげる』

未来『うん、じゃあね』

響「うん』

と言つて電話を切り、人ごみの中を歩いていつた。

Side out

翼 Side

翼「はあ』

奏「どうした？翼、緊張しているのか？」

神無「ああ、緊張しているようだな』

などと茶化しているが緊張している私には逆効果だつた

翼「緊張するに決まつてるじゃない。ここでもし失敗したら・・・

神無「しようがねえなあ。・・・奏、翼ちよつとこつちにこい』

奏 翼「どうした（んだ）の？」

といつて寄つて来た所を二人とも抱きしめた。

奏 翼「なツ」

神無「ほら、こうしたら何にも恐くないだろ』

翼 「ああ」

奏 「それだけじゃないさ。私たちには勇気が出てくる合言葉があるだろ？」

と、奏が言うと俺達は真剣な顔になつて。

奏 「アタシと神無、そして翼、三翼揃つたドライブワイングなら」

神無 「どんな空も越えて、どこまでも高く」

翼 「そして、どこまでだつて飛んでいける」

と、いうと三人で笑いあつた。

神無 「それじゃあ頑張つていこう」

奏 翼 「(おう!) うん!」

S i d e o u t

響 S i d e

響 「うわあ凄い込んでる・・・」

と言つて響が目にしたのは人で出来た絨毯だつた。

前のほうは込んでいるだらうと予想して後ろから来たことで見えた景色だつた。

何とか席を取るとライブ開始を待つた。

そして5分もするかしないかの時照明が消えていき、響きは驚いた顔をしてあたりを見回した。

するとどこからとも無く前奏部分と思われるメロディイが聞こえてきた。

そして、

神無 「きこえますか・・・?♪」

翼 「激情 奏でる♪」

奏 「ムジーク♪」

神無 「天に♪」

翼 奏 「解き放て♪」

奏 「聞こえますか・・・?♪」

神無 「イノチ始まる♪」

翼 「脈動♪」

奏「愛を♪」

神無 翼「突き上げて♪」

響（すごい・・・かつこいい・・・これがライブなんだ・・・ドキドキして目が離せない）

と響が思っていると、一曲目が終わつた。

すると、ここで一言ずつなにかを言う場面になつた。

奏「みんなライブを楽しんでるかー!!」

翼「私たちの歌を聴きに来てくれてありがとう」

神無「テメーら騒ぐ準備は出来てるか? 出来たヤツから声上げろー

!!

観客「ウオオオオオオオッ!!!」

と、きて観客が声を張り上げる。つられて響も

響「ウオー！」

と声を上げた。

・・・そして中盤に差し掛かつた頃それは起こつた

Side out

二課 side

朔夜「ネフシユタンの鎧、順調に起動中」

あおい「このまま行けば、あと1曲で起動します
ビーツ！ビーツ！ビーツ！」

と警報が二課の全体に鳴り響いた。

弦十朗「何事だ！」

朔夜「ノイズの出現パターンを検知！」

あおい「場所特定・・・東京ネオ国技館・・・ライブ会場です！」

弦十朗「なんだと!?」

Side out

神無Side

ドガアアアアアンツッ!!

突如として襲い掛かつた爆発によつてライブ会場が凍りついた。
なぜならこのタイミングでしかも観客ギリギリの所に火薬を爆発
させる予定も無く、置いても無かつた。

それなのに起こつた爆発。

ライブ会場が凍つてしまふのも仕方ないと言えただろう。

そして俺は・・・いや、一部の観客を含んだ俺達は見つけてしまつ
た。この爆発を起こした犯人・・・ノイズを。

となればどうなるかは一目瞭然だつた。

観客A 「ノ、ノイズだああああアアアアアアツ!?

観客たち 「う、うわあああアアアアアアツ!?

当然のように観客たちは大パニツクになつた。

なぜならざつくり言つてしまえばこちらはどんな攻撃をしても効
かず、なのに向こうは触つただけで相手を殺せる化け物集団と言うの
が世間一般の認識だからだ。

だからこそ俺は原作にいた終わりの名を名乗つた少女のように、

神無「うろたえるなツツツ!!!」

と、叫んだ。

神無「ノイズは下手な刺激を与えないければ、ゆつくりと動くはずだ
!!・・・だからこそ落ち着き、迅速にこの場を離れるんだ!!」

その声が引き金となりほとんどの観客は、わずかな被害で静かにそ
して迅速にライブ会場をあとにした。

そのお陰で、シンフォギアを纏つても問題ないくらいには人が減つ
た。

だからい俺は二人に、

神無「今ならシンフォギアを纏つてもいいだろう・・・何かあつて
も弦さんには怒られんだろうしな」

翼「神無がそういうなら」

奏「ま、この状況ならだんなも強くは言えねえだろ」

神無「F i g h t t o y a t o u g a m i t r o n」

翼「I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n」

奏「C r o i t z a l r o n z e l l G u n g n i r z i z」

^z_l」

そして、ギアを纏いノイズと対峙したのだつた。

12話

神無Side

ノイズと相対して、武器を構えて突撃した。

奏は、ステージから観客席を見る向きから左側のノイズを翼は右側を、そして俺は、中央のノイズを倒していくた。

だが10分もしてノイズを倒し続けていると

奏「次から次へととんでもない数いるなあ」

翼「まったくそのとおりね」

神無「つつても調子いいし、イレギュラーさえなけりやどうにかなるだろ」

と、のんきに会話し始めていた。

だが、俺たちは気づいてなかつた。この場の状況を最悪の展開にしてしまう、イレギュラーがいたことに・・・。

Side響

すごい・・・。

ノイズがすぐ近くにいるだけでも驚きなのに、あの、ドライブウイングの三人が聞いたことのない歌をうたつたかと思ったら、戦闘服のようなものに変わつてノイズを倒している。

一般人の私にはとても遠いおとぎ話のような出来事が目の前で起こっていた。

ガクンツ

いきなり足元が揺れた。

気がついたら私は宙を舞つていた。

Side out

神無Side

ガラアアアアアアアツツツツ

とてつもない音がした。

振り向いたら観客席の一部が崩壊していた。

近くにいた奏が叫んだ。

奏「二人ともツ！逃げ遅れがいたぞツ！」

翼「え??」

神無「なツ??」

三人は動搖した。

守るべき存在がいるというのはとても厳しい状況であると言わざるをえない。

なぜなら、その存在の安全を確保しながら戦わなければならぬからだ。

神無「奏ツ、全力で逃げ遅れを守れ!!

残りは俺たちでやる」

奏「大丈夫なのか」

神無「お前も、もうそろそろ時間だろ」

奏「ツ!!」

時間と言うのは、奏は薬（LINKER）の効力が切れて、一気にパワーダウンしてしまう時間だ。

そうなつてしまえば、奏には悪いが足手まといになつてしまふ。それを理解したのか、奏は歯噛みしながら頷いた。

それを見た俺は、翼のほうをむいて、

神無「いけるか？翼」

翼「うん」

と返され俺達はノイズに挑みかかつた。

Side out

響Side

何がおきたのか分からなかつた。

突然足元が揺れたと思ったら、大きな音とともに宙を舞つていた。

そして、落ちた痛みか何かで意識を取り戻した。

今の状況が分からぬ私は、怯えながら周りを見渡した。すると、ステージのほうから、

奏「ボーツとするな！急いで逃げろ！」

と言ふ声が聞こえ、ノイズが近くにいることを理解し、急いで逃げようとした。

・・・が立てなかつた。

落下した時に足をくじいたのか、足から痛みが走つて立ち上がる事ができなかつた。

そのため、がれきを支えにして歩き出した。

がその速さはとてもゆっくりだつた。

露払いをしていた奏さんが、その様子に気がついた。

一瞬気がこつちに向いた時にノイズたちが、襲い掛かってきた。

それを奏さんは、槍を自分の前で回して、盾のようにして私を守ろうとしていました。

しかし何十というノイズの攻撃を受けて、槍や鎧?が砕けてきました。

・・・あれ・・・

・・・声が聞こえる・・・?

奏「生きるのを諦めるなツ!!」

ツ!!

何故だか倒れていたけど、その言葉で意識を取り戻した。

S i d e o u t

神無S i d e

逃げ遅れた女の子（後で知った）が倒れて、奏が駆け寄つたのを見た。

すると、奏が何か女の子を呼びかけた後、立ち上がつてこう言つた。奏「いつか心を空っぽにして歌つてみたかったんだよな」といつた。

俺や翼はそれだけで奏のやらんとしている事が分かつた。だがもう遅かつた。

奏「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e

n a l

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z

i z z l

G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n

a l

E m u s t o l r o n z e n f i n e z i z z l

その直後、恐ろしいエネルギーの流れを感じた。

そして、ノイズはいなくなつた。

だが奏は歌つてしまつた。命をくらい尽くす歌を。

倒れる奏、涙を流しながら駆け寄る翼。

それを見て俺は絶望していた。

また父と母のように大切な人を失つてしまうのかと。

・・・フザケルナ・・・

そんな結末、世界が・・・全人類が認めても、俺は絶対認めない。
神無「絶対認めるものかアアアアアアア！」

そう叫んだとき、体は勝手に動いていた。

全身から黒い光がほどぼしり、その光を右手に集めてそれを奏にぶつけた。

すると、奏の傷が治つていった。

それを見届けた後俺は意識を失つた。

神無Side

目を覚ましたら、翼と奏が、心配そうな顔で俺の顔を覗き込んでいた。

安心したかと思つたらいきなり一人は眉を吊り上げて説教してきました。

：：：1時間くらい説教されていたが途中からは同じ事ばかり言つていた。内容としては、心配をかけるなと言う事だった。

そして二人が安心した顔で出て行くと、入れ替わりで、弦さん（おぼえているかもしれないが風鳴 弦十朗さんだ）が入ってきて、ひとりしきり様子を見て、大丈夫そうだと分かると、話しかけてきた。

弦十朗「大丈夫そうだな」

と、言つてきたので肯定しておいた。

すると、数秒してから弦さんは、こう切り出してきた。

弦十朗「昨日の事件（コンサート事件）の事だが最後何があつた？俺たちでも把握できない何かがあつたのは分かつたが」

神無「よく覚えてません得に最後なんて必死でしたから」

弦十朗「だろうな」

・・・嘘だ、俺はよく覚えている。

最後、俺はあの瞬間、心意（インカーネイトシステムとも言う）を使つた。

心意とはその人のトラウマが引き起こす一種の超能力だ。

その人の「イヤだ」、「信じたくない」「消えてしまえ」などの暗い感情や、「出来る」「信じる」などといった。明るい感情が、現実すら捻じ曲げる力と言つてもいい。

・・・ぶつちやけONEPIECEの霸氣や新世紀エヴァンゲリオンのATフィールドの汎用性をあげたものみたいな物だと思つてくれればいい。

横暴な言い方をすれば気合の延長線上にあるものだと思えばいい。そして、今回の心意は、俺の家族を失つたトラウマのあの出来事さ

えなければと言う俺の暗い感情が起こしたものだつた。

簡単に言えばBLEACHの盾舜六花の双天帰盾のようなものだが形が違うので俺はこの心意を、ログパニッショ記録消去と呼ぶ事にした。

そして仕事（アイドル）の事を話してお開きになつた。

俺が起きて次の日、信じられない光景が目の前に映つていた。

奏が元気にLiNKERなしにギアを纏つて戦闘訓練をしていた。事情を聞くと、なんとあのコンサート事件からというもの、LiNKER無しでギアを纏えるほどの、適合値になつたそうだ。

だがそんな事出来るのかと思つていると、感覚的に事情が把握できた。

多分だが、ログ・パニッショで消した事象は細かく選べるらしく、今回消したのは絶唱を使つた事実と、LiNKERを使って適合値を上げたと言う事実の中で、LiNKERの部分だけを消した為、なにかの事情で適合値が上がつていると言つ結果になり、結果、LiNKER無しでギアを纏えるほどの、適合値になつたようだ。

そして戦闘訓練が終わつてからは、俺も合流してドライブワインディングの歌や踊りの練習を始めた。

そして、家に帰つたら桜が全ての仕事を終わらせていて、

桜「お兄様はお兄様のしたいことをなさつてください」

と言われて涙が出そうになつたり、マリアたちが今度無茶をするなら、自分たちにも考えがあると言つてきた。

次の日からは俺は龍の変身とアーツ（翼の蒼の一閃みたいなもの）の練習を始めた。

そして、あれから一年たつて、俺は、龍への変身と、かの有名なスマッシュでブラザーズなゲームの俺の苗字と同じ名前を持つ王子の必殺技を取得して使いやすくした。

スマッシュでブラザーズなゲームの必殺技について改造も一緒に俺風に詳しく説明すると、

・龍穿射・・・俺が持つているエネルギーを球状にしてとばし、当たつたものを痺れさせて動きを止めさせるというもので、チャージすればある程度大きく、長く痺れさせる事が出来る。

・跳龍穿・・・武器を持つてない手や足を槍状に変化させて突き刺す技で、地面や壁などに刺して、方向転換も出来る。

・飛龍翼・・・背中から翼を出して高くジャンプする物だつたが、改造によつてそのまま空を飛べるようになつた。

・反龍穿・・・いわゆるカウンター技で相手が攻撃してきた時に、その攻撃を無効化して、その攻撃力を倍にして返す。

と言う感じにおさまつた。

と何も大きな事件が無いまま1年が過ぎこの物語の主人公、神威神無・・・そして、原作の主人公、立花 韶がリディアン音楽院に入学する年、原作が始まつた。

*この世界のリディアンは元女子高で神無の入学した年から共学になつたと設定とします。
早めに言わす申し訳ありません。

裏話

神無「さーて、高校決めないとなー」

弦十朗「何を言つてるんだ神無。神無の高校は、リディアン音楽院だぞ」

神無「ゑ・・・でもあそこつて女子高じや・・・」

弦十朗「そんなものどうとでもなるさ。入る相手はあのドライブウイングの人気N.O. 1神威 神無なんだからな」

緒川「その上、今からでも共学にするくらいなら問題ないですしね」

神無「他の男子は・・・?」

弦十朗 緒川「・・・(ファイツ) メソラシ

神無「ハア・・・」
と言つた会話がありましたマル。